

讚美歌21 50

Evangelisches Gesangbuch (EG) Nr. 193

T:Martin Luther M: Martin Luther (Geistliche Lieder, 12.Jh.)

- 1 みことばもて主よ、われらを支えて
打ち砕きたまえ、主にそむく悪を。
- 2 示したまえ主よ、この世に力を。
主こそわが砦、われら主をたたえん。
- 3 聖霊をくだして ひとつとしたまえ。
終りのときには いのちをたまえや。

- 1 Erhalt uns, Herr, bei deinem Wort
und steure deiner Feinde Mord,
die Jesus Christus, deinen Sohn,
wollen stürzen von deinem Thron.
- 2 Beweis dein Macht, Herr Jesu Christ,
der du Herr aller Herren bist;
beschirm dein arme Christenheit,
dass sie dich lob in Ewigkeit.
- 3 Gott Heiliger Geist, du Tröster wert,
gib deim Volk einerlei Sinn auf Erd,
steh bei uns in der letzten Not,
g'leit uns ins Leben aus dem Tod.

テサロニケへの第1の手紙5章16節「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。これがキリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」(新改訳版)

世界が混とんとし、出口がみえず、今にも自分まで倒れそうな状況で、私たちは「いつも」喜んでいただけるのでしょうか。そもそも、私たちは、不安と恐れを常に抱えすぎると、喜びをいただくことができなくなると思われます。

日々の努めを果たすよう追い立てられ、それを十分に果たせない負い目があるなか、私たちに、(絶えず)祈るような時間はあるのでしょうか。疲労に加えて無気力と無感動になり、気分転換する享楽で時間は埋まり、私たちは祈ることから離れているのではないでしょうか。

そもそも、私たちは「全てのことに」感謝しながら生きられるのでしょうか。苦悩が深くても、困難が大きくても、感謝することの難しさはもちろんです。そもそも、私たちは、いろいろなことを当たり前にし、大事なことや大事な人に、悲しいことに、心から感謝できなくなっていますか。

パウロが書簡を送ったテサロニケの教会は、あたかも「模範」的な信仰者で満ちていたように書かれています。本日の聖書の下りは、そのような人々に対して期待できるとしても、私たちに対して期待できることなのかという疑問すら起こってきます。

このように、私たちのおかれている状況は、あまりにも聖書から遠くなってしまっています。無感動で祈りから離れ、感謝できない現代人に、こうした聖書のことばが、響かなくなっているのです。そこで、まず、私が喜び、祈りが聞かれたと思い、感謝することを、お話しします。

今週の11月16日に、日中韓及び東南アジアとオセアニアの15ヶ国政府が、地域包括的経済連携（協定）(RCEP)に署名しました。反グローバルゼーションや一国至上主義が力を増し、コロナ危機で緊急事態が続いているなかで、不思議に思われる方もおられるでしょう。しかし1998年のアジア金融危機以来、東アジアの地域経済統合を制度的に実現することは、私自身のみならず、多くのアジアの課題に深く関わる人たちにとって、大きな悲願だったのです。

これは、地域の貿易・投資、経済成長やビジネスを促進する以上の意味があるのです。アジアは、17世紀以降、欧米諸国に植民地化され、分断・支配されてしまいました。当時は、アジアは、欧米よりもはるかに産業が進んで豊かで、域内も開かれ、2千年以上さかのぼる文明を引き継いでいました。欧州からの侵略者によって伝統ある文明が徹底的に破壊されたアメリカ大陸やアフリカ大陸と異なり、東アジアでは文化的多様性は維持されました。これこそ隣人から学ぶ潜在力(学習能力)の土台となり、世界に向けて、新時代の価値や、問題解決策を提案できる可能性を持つ根拠であると思います。

私が関与してきた分野は労働と人の移動です。東アジアの人々が国外で働いて家族に行く送金が貧困からのセーフティネットを担うだけではないのです。新しい人生の可能性をもとめ、域内を移動する人たちのエネルギーこそ、この地域の底力です。

RCEP交渉は8年間困難を極めました。しかし、コロナ危機のなかで、この時点で交渉決着できて、その意義はもっと大きくなりました。インドは、国内で貧困と経済格差が拡大するなか、零細事業者への貿易・投資自由化の影響を懸念し、交渉から離脱したのは極めて残念です。私も、4回インドを訪問しました。過去10年、日印経済協力は、地道に拡大しており、RCEPにインドが参加できる時期が必ずやってくると信じて疑いません。

RCEP交渉開始の時期には、東アジアの地域経済統合は、急速に影響力を増した中国を利する「大中華圏」をもたらすという警告が著名な専門家から出されて動揺しました。領土問題や歴史問題などによる日中関係や日韓関係の悪化も域内協力にマイナスに作用しました。しかし、RCEPは、これらの問題を超えて進むための新たなルールに合意しています。

コロナ危機のなかで、現在、私たちの直面する現実は厳しく、日本の私たちは、第三の感染の波の前で、息を飲んでいるような状態です。

それにもかかわらず前に向かって生きること、決して希望を捨てないことがあなたに可能だとすれば、その根拠は、現在この瞬間も、一緒に生きておられる神様に信頼するからです。一見、絶体絶命のような状況で、あなたが勇気を持てるなら、それは、神様への信頼があるからです。こうして私たちは、如何に過酷な状況にありながら、平安を得ることもできるのです(先週のチャペル)。

祈るといっても、そもそも何を祈っていいかわからない方も多数おられるでしょう。人々の祈りには、多くの感謝や願望が含まれます。しかし、祈るという行為は、まずは沈黙することであり、この瞬間に神様と共にあると感ずることだと思ひます。

「いつも」喜んでいなさい、「全てのことに」感謝しなさいということが可能だとすれば、それは、神様と共にあることへの喜びと感謝であり、祈ることとつながっているのです。

公の場所で語られる祈りが、「決まり文句」ばかりで形骸化し、外交辞令や、キリスト教の教義の繰り返しとしか感じられないとしたら、それは、祈りではないかもしれません。

人に聞いてもらう祈りというのは、いろいろな誤解と偏見のリスクを伴います。祈りは、本来、あなただけの祈りです。自分では乗り越えられない困難を前に、「神様来てください」、「近くにいてくださいと祈ることは、初代教会の祈りそのものであり、私たちにもできることです。現代人が祈ることを忘れた結果、心の豊かさや平安も失われてしまったなら、非常に悲しむべきことです。

多くの現代人は、もはや祈ることができません。しかし、だからこそ、祈ることは必要なのです。困難で危険な状況においても、祈りは、神様と共に生きている喜びと感謝を与え、勇気を与え、新たな道をひらいてくれます。それが、いつどのように実現するかは、人間の知恵を超えています。それでも、「神様、来てください、近くにいてください」と祈りましよう。